

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 11 日現在

機関番号：35405

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06788

研究課題名(和文) 在外教育施設における高校生の特異性の解明とそれに基づく指導法の開発

研究課題名(英文) Distinctive characteristics of high school students in a Japanese educational institution overseas and development of a teaching method

研究代表者

関谷 弘毅 (Sekitani, Koki)

広島女学院大学・国際教養学部・講師

研究者番号：60759843

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、在外教育施設である日本人学校で学ぶ高校生の特異性を明らかにし、それに基づく指導法を提案することであった。質問紙調査や縦断的なインタビュー調査の結果、日本人学校で学ぶ高校生は、文法を重視する傾向が低く、学年が進むにつれて他者との関係性を志向する学習動機が低くなり、自律した学習者となっていくことが示唆された。また、日本に帰国後、外国の人々や文化と交流する意義や楽しさを再認識し、英語やその他の外国語に対する学習意欲が再向上することが示唆された。それらの結果を踏まえ、物語文を題材にシャドーイングやディクテーション活動で発話の定着をねらいとする準備をし、寸劇につながる指導法を提案した。

研究成果の概要(英文)：The present study aims to clarify the distinctive characteristics of high school students in a Japanese educational institution overseas and to develop a teaching method for those students. The results of questionnaires and interviews showed that although they do not value the importance of grammar learning at an early stage, they gradually learn the necessity of rules and become more autonomous learners. The results also showed that after they return to Japan, they recognize the meaning and joy of cultural exchange with foreign people, and that it enhances their motivation for learning foreign languages. Based on these results, a teaching method was suggested that aims to create and present a skit applying shadowing and dictation activities.

研究分野：英語教育学

キーワード：日本人学校 在外教育施設 高校生 英語学習 学習観 学習動機 指導法

1. 研究開始当初の背景

(1) 2011年4月に、高等学校としては世界初となる日本人学校高等部が中国上海に開校した。日本人学校とは、日本国外において主に日本国籍を有する児童・生徒を対象に日本の教育課程に沿った教育を受けさせる在外教育施設である。今後世界各地で日本人学校高等部の設置の検討が予想される中、英語教育においても日本人学校の高校生の特異性を把握し、それに適した教育活動を提案することは急務である。

(2) 一般に、学習対象言語が生活環境において日常的に触れる場合は第二言語、生活環境では触れず、主に教室で学ぶ場合は外国語として区別し、その学習プロセスも異なるとされている (Brown, 2007)。非英語圏の日本人学校の高校生にとって、英語は外国語である一方で、現地語である中国語は第二言語である。非英語圏で生活し、第二言語として現地語を学ぶプロセスは、間接的に外国語である英語の学習にも何らかの影響を与えると予想される。

(3) 関谷 (2013) は、以上を踏まえ、上海日本人学校の高校生を対象に英語に対する学習ピリーフを日本一般の高校生と比較検討した。その結果、1年次において文法を重視する学習ピリーフは日本の一般の高校生の方が高い傾向が示された (Figure 1)。日本人学校の高校生にとって生活言語は中国語環境である。多くの生徒が文法的な理解を伴わずにサバイバルレベルの中国語を日常で使用しており、中国語の文法的重要性に対する意識が高まらないと考えられる。そしてそれが外国語である英語学習にも転移した可能性が示唆される。

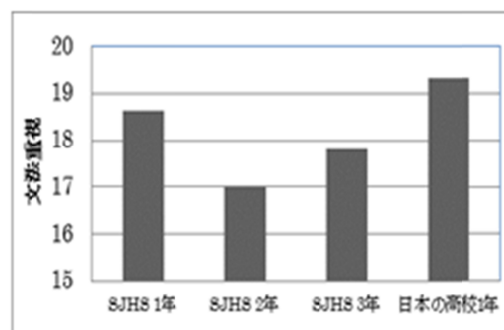


Figure 1 文法重視に関する学校・学年間の比較

*SJHS: 上海日本人学校高等部

今後は、そのような非英語圏で第二言語を使用する経験が、外国語の学習における学習観・学習方略にどのような影響を与えるかのプロセスを解明することが必要である。

2. 研究の目的

本研究では、以上を踏まえ、上海日本人学校高等部の生徒がどのように英語学習に対する学習観や学習方略を形成するのかを明らかにする。さらにその結果を踏まえ、効果的に働く教育方針、指導法を実験授業等によって効果測定したうえで提案を試みたい。

3. 研究の方法

(1) 学習観・学習方略の形成

協力者

上海日本人学校高等部に3年間通い、卒業後帰国し日本の大学に通う大学生7名。

インタビュー

20分から30分間の半構造化面接を実施。外国語居住歴、外国語(第二言語)学習歴、それについてどう感じていたか、中国における中国語使用・学習が英語学習にどう影響を与えたかについて尋ねた。

分析

面接内容の逐語データをすべて書き起こし

以下の手順で分析を進めた。第 1 に、具体例を抽出した。対象者の逐語データから、分析テーマと関連する箇所に着目し、概念の具体例とした。第 2 に、概念の解釈を行った。解釈にあたっては、分析テーマに対する答えを意識しながら概念を生成した。第 3 に、概念の吟味を行った。他のデータとの関連から概念名の妥当性の検討を行い、必要に応じて修正した。第 4 に、カテゴリーの生成を行った。具体的には、概念がある程度生成されたら、それらの関係性を検討した。第 5 に、カテゴリーグループの生成を行った。具体的にはカテゴリーが生成されたのちその関係性を検討した。

(2) 指導法の開発

予備実験

大学生を対象に、日本語を一切禁止のうえ、様々な言語活動を通して英語力を向上させることを目的としたイベントを実施し、様々な言語活動を行った (関谷, 2017)。その中から中国における第二言語使用経験から外国語である英語学習における学習観、学習方略形成に好ましい影響を与えると予測される活動を選定し、それを高校生向けにアレンジした。

協力者

2016年8月に上海日本人学校高等部で実施された夏期講習の受講生8名。

実践内容

講習は1回90分で3日間実施された。活動は、1,2日目は物語文を題材にシャドーイングを応用したグループ活動を行い、内容を理解するとともに口頭産出の素地を作ることを目指した。3日目は、それをもとに参加者が登場人物の役割を担って寸劇を作り発表した。

1,2日目の具体的な手順は以下の通りであ

る。4人程度の2つのグループに分ける。1人指名し、ヘッドホンを付けて題材の物語文をシャドーイングする。他の参加者はそれをノートにすべて書き取る。交代し別の参加者がシャドーイングをする。他の参加者はそれをノートにすべて書き取る。以降、3周(1人につき3回)終わるまで繰り返し交代して行う。目安は各参加者の書き取りが9割程度完成するまでとし、3周で十分でなければもう1周加える。指導者が各参加者の書き取ったものを1文ずつ別の紙に大きく書いて示し共有する。正解は教えず参加者によって異なる個所を確認する。異なる個所を確認するため、もう1周シャドーイングを行う。複数の意見が出た個所に関してどれが正しいかを再度確認する。正解は教えない。ヘッドホンをはずして全員でCDを聞く。トランスクリプトが正しいかの最終確認をする。スクリプトを渡しもう一度聞く。CDに合わせ、ヘッドホンをはずし全員でシャドーイングをする。

3日目の具体的な手順は以下の通りである。グループに分かれ、扱った題材に基づく5分程度の寸劇を作るにあたり、配役、セリフ、演出を話し合いながら考え、練習する。すべてのグループが大部屋に集まり、寸劇を発表する。

分析

寸劇の発表後に実施した自由記述質問紙調査により得られた回答を分析した。

4. 研究成果

(1) 学習観・学習方略の形成

中国における第二言語としての中国語の学習や使用は、外国語としての英語に対する学習観や学習方略の変容を促すことが示唆された。具体的には、高校入学前に日本で英語を

学んだときは主に文法規則の習得が大切であるという信念を持っているが、中国で生活上必要に迫られ言語的課題を達成する経験を通して、語彙の修得の重要性、及び文の組み立てに関する知識が不完全でも語だけでも使用することに対する有効性の認知が高まり、英語に転移する様子が見え始めた。ただし、このような転移は、幼少期から日本語と中国語のバイリンガル環境で育ち、高度な中国語運用能力を修得していると見られなかった。中国語の学習プロセスが認知されないためであると考えられる。また日本に帰国、大学進学後は外国語学習や異文化交流に対する学習動機が高まり、他の外国への訪問、滞在への行動につながることを示唆された。

(2) 指導法の開発

前項で述べた実践内容は保存及び公開のため録画された。また、自由記述質問紙調査により得られた回答を分析した結果、実践を通して言語の理解（聞く、読む）の側面だけでなく、産出（話す）の側面に対する重要性の認知を高め、機能としての言語に対する理解を深めたことが示唆された。

(3) 本研究の限界と今後の展望

本研究は英語学習に対する学習観や学習方略を形成するプロセスを、第二言語環境で中国語を学習・使用する経験からの転移に着目して検討した点で一定の貢献ができた。今後は一層説得力を高めるため、より厚みのある実証データを収集することが肝要である。量的分析と質的分析を組み合わせ、横断的な分析だけでなく縦断的な分析による知見を積み重ね、Figure. 2 に示すような媒介モデル案を丁寧に検討し、第二言語学習の経験が他の外国語学習に与える影響のメカニズムを包括的にとらえることが必要である。

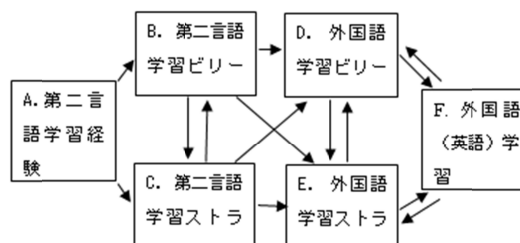


Figure. 2 媒介モデル案

< 引用文献 >

Brown, H. D. (2007). *Principles of Language Learning and Teaching, 5th edition*. White Plains, NY: Pearson Education Inc.

関谷弘毅(2013). 「在外日本人学校の高校生の持つ特異性の検討と新たな教育活動の提案 - 学習ビリーフ, 学習動機, 学習ストラテジーに着目して - 」『STEP BULLETIN』25, 278-287.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 1 件)

関谷弘毅 (2017). 「大学での英語学習課外活動の立ち上げに関する実践報告 - ITC (Intensive Training Course) 合宿を通して - 」. 『広島女学院大学国際教養学部紀要』, (3) 84-93. 査読無

URL:

<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hju/metad ata/12201>

[学会発表] (計 1 件)

関谷弘毅 (2016). 「在外教育施設で学ぶ高校生の英語学習における特異性 - 学習観、情意要因に着目して - 」. 『日本教育心理学会総会発表論文集』, 58, 428.

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

関谷 弘毅 (SEKITANI, Koki)

広島女学院大学・国際教養学部・専任講師

研究者番号：60759843